日本人にとって美しさとは何か（1）

だいぶ以前に、農学専門のある先生から①興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民族などでどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返って来る。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ歯切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを挙げてほしいと言うと、②「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは比較は無理だから、結局諦めました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観の差異以上に、日本人とアメリカ人の美意識の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシャ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるという考え方が強い。その秩序とは、※左右相称性であったり、部分と全体との比例関係であったり、あるいは※基本的な幾何学形態との類縁性など、内容はさまざまであるが、いずれにしても③客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一貫している。逆に言えば、そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは「美」を表現したものとなる。

典型的な例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が一対八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシャにおいて成立した美の原理である。ギリシャ人たちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。

（中略）

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているようには思われない。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それは「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』筑摩書房 による）

※左右相称性…左右の対応するものが、つりあうように均等に配置されていること。
基本的な〜類縁性…ここでは、形やありかたが、基本的な図形などに似通っていること。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「興味深い話」とあるが、何が興味深いのか。最も適当なものを選びなさい。

ア アンケート調査の話が、日本とアメリカの動物に対する考え方の違いを明らかにするものであること。

イ アンケート調査は日米比較文化論になるはずだったのに、調査がうまくいかず失敗に終わってしまったこと。

ウ アンケート調査で得られた答えに、日本人とアメリカ人の美に関する捉え方の違いが表れていたこと。

〔　　〕

(2) ——線②「『そうだなあ、……答えになる」とあるが、ここからどのようなことが考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア 日本人は、「美」とはある客観的な原理に基づく秩序から生み出されるものだと考えているということ。

イ 日本人が「美」を考えるときは、どのような状況で「美」が生じるか、ということに感性が働くということ。

ウ 日本人にとっての「美」は明確なものではなく、何がどのような場合に「美」が生まれるかは意識されないということ。

〔　　〕

(3) ——線③「客観的な原理に基づく秩序が美を生み出す」とあるが、本文中の八頭身の美学の例において、客観的な原理とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 頭部と身長が一対八の比例関係にあること。

イ 八頭身の美学がギリシャにおいて成立したこと。

ウ 紀元前の美の原理が現在まで伝わっていること。

〔　　〕